

命の経験の第四段階へと入り、
完全に成長した人に到達して神の定められた御旨を完成する

(木曜日——午後の部)

メッセージ 3

命の経験の第四段階 (2)

昇天を認識する

聖書：使徒 2:36. ヘブル 2:9. 4:14-15. 7:26. 12:2. エペソ 1:19-23

- I. 人・救い主の昇天は、彼が、創造、肉体と成ること、人の生活、十字架、復活の過程を経過して、神また人として、創造主また被造物として、贖い主、救い主、命を与える霊として天の職務に就任することであり、それは神の行政を執行し、神の新約エコノミーを完成するためです。
- II. わたしたちは主の昇天の客観的な面を見る必要があります：
- A. 主の昇天は、彼に栄光と尊貴を冠として与えました——ヘブル 2:9：
1. 栄光は、イエスのパーソンに関する輝きです。尊貴は、イエスの価値に関する尊さです——I ペテロ 2:7。
 2. キリストは状態において栄光であり、地位において尊貴です。彼はすべての王や支配者の上におられます。これが彼の尊貴です。
- B. 主の昇天は、神の行政のために主を御座に着かせました。ヘブル第 12 章 2 節は、キリストが今や神の御座の右に座しておられると言います：
1. 神がキリストの中で御座に座しているという事実は、神がキリストの中から、キリストを通して全宇宙を管理していることを意味します。それは光がともし火の中から、ともし火を通して輝くのと同じです——啓 22:1, 3. 参照、21:23。
 2. キリストは今や御座の上において全宇宙を管理しています。彼は唯一の執行者、王の王、主の主です。彼は地の諸王の支配者です——1:5. 17:14. 19:16。
 3. キリストが管理することは宇宙と関係があります。しかし彼が神の新約エコノミーを完成することはご自身を増殖し、彼を複製して、召会、彼のからだを建造することです。その結果は新エルサレムです——参照、使徒 5:31。
- C. 「こういうわけで、イスラエルの全家は、確かに知っておきなさい。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は主またキリストとされたのです」(2:36)。この節において「された」という言葉は、「就任した」を意味すると理解することができます。キリストの昇天において、神はキリストを天の務めに就任させました：
1. 人・救い主は、昇天において万物を所有する主とされました。彼は今や全宇宙、神の選ばれた民、すべての積極的な物、事、人を所有する主です。
 2. 人・救い主は昇天において神の油塗られた方（ヘブル 1:9）としてのキリストとされました。それは神の使命を完成するためです。
- D. わたしたちは今や復活と昇天においてキリストと一です（エペソ 2:6）。結果として、わたしたちは復活において命と力を持ち、昇天において権威も持ちます。わたしたちは主と接触するとき、彼が何であるかを認識し、また彼の身分、地位、職務を認

識する必要があります。

Ⅲ. わたしたちは主の昇天の主観的な面を見る必要があります——参照、詩 91:1. 雅 4:7-8.

6:10 :

- A. キリストは彼のすべてを超越する昇天において、ハデス [陰府] (死んだ人々が拘留されている所)、地 (墮落した人々が神に反対して行動している所)、空中 (サタンと彼の暗やみの勢力が神に反対して活動している所)、すべての天 (サタンも行くことのできる所——エペソ 1:20-21. 4:8-10. ヘブル 7:26. ヨブ 1:6-12 前半. 2:1-6) を超越しました。キリストは彼の昇天において天を通して行かれたので (ヘブル 4:14)、今や彼は天におられるだけではなく (9:24)、天より高く (7:26)、すべての天よりもはるかに高いのです (エペソ 4:10)。
- B. エペソ第 1 章 19 節から 23 節は、昇天したキリストからわたしたちに対する伝達があることを啓示しています。22 節は、神はキリストを「万物の上にかしらとして召会に」与えたと言います。「召会に」という句は、昇天したキリストから召会、彼のからだに対する伝達を示します：
1. 神は昇天したキリストに大いなる賜物を与えました。すなわち、万物の上にかしらとならせました。神がキリストをかしらとしたのは、召会にです。それは召会に伝達され、召会はそれにあずかります。
 2. 20 節から 22 節は、四つの段階において神がキリストの内に力を働かせたことを見せています。第一は、彼を死人の中から復活させたことです。第二は、彼を天上で神の右に座らせたことです。第三は、万物を彼の足の下に服従させたことです。第四は、彼を万物の上にかしらとして召会に与えたことです。
 3. キリストの力、すなわち、復活の力、昇天の力、服従させる力、かしらにつり上げる力は、「信じるわたしたちに」また「召会に」です。かしらであるキリストが到達し獲得したものは何であれ、彼のからだである召会に伝達されています——19, 22-23 節。
 4. わたしたちは神聖な伝達を信じるだけであるべきではありません。わたしたちは日ごとにそれを経験する必要があります。召会は、高く上げられ昇天したキリストの伝達の中にあるべきです。この伝達の中で、召会は彼のすべての到達、すなわち、死人の中からの復活、彼の超越において座らせられること、万物を彼の足の下に服従させること、万物の上のかしらであることにあずかります。
 5. 神聖な伝達は一度限りではないので、召会は絶えずこの伝達を受けるべきです。これは昇天したキリストが彼の昇天の満ち満ちた意義を伴って召会の中へと絶えず伝達されることです。神聖な伝達を通して、わたしたちは天におられるキリストと結合します。わたしたちが清い容器であり、進んで自分自身を開く限り、この伝達はわたしたちの中で絶えず起こります——2:6。
 6. わたしたちは自分自身を開いて、言う必要があります、「主よ、わたしはここにいます。わたしはあなたを愛します。わたしは自分自身をあなたにささげます。主よ、わたしはあなたのために自分の全存在を空にします」。あなたはどのように祈るなら、この神聖な伝達を経験し、享受します。
- C. 神聖な伝達の偉大な目標は、キリストの中ですべてのものをかしらにつり上げるこ

とです (1:10)。すべての時代における神のすべての案配を通して、新天新地においてすべてのものはキリストの中でかしらにつり上げられます。これが神の永遠の行政とエコノミーです：

1. このかしらにつり上げることは、宇宙的な人を通して、神によって行なわれます。この人のかしらはキリストであり、この人のからだは召会です。
 2. 神はキリスト (かしら) と、召会 (からだ) から構成されている宇宙的な人を通してすべてのものをかしらにつり上げつつあるので、わたしたちはからだの肢体として頭首権の下でからだの一を守る必要があります。この一は、神が用いてキリストの中ですべてのものをかしらにつり上げるための手段、経路、領域です。
 3. 全被造物は神の子たちの出現を期待し、熱心に待ち望んでいます。その時、すべての分裂と分離は取り除かれ、人類だけではなく、すべてのものがキリストの中でかしらにつり上げられます——ローマ 8:19-22。
 4. 人の観点によれば、全宇宙をかしらにつり上げることは、不可能であるかのように見えますが、神には不可能なことはありません——マルコ 10:27。
- D. キリストは彼の昇天において、彼のからだである召会のかしらとされました。それは彼の豊満の中で神を表現するためです——コロサイ 1:18. エペソ 1:23. 3:19 :
1. かしらとからだは一であり、宇宙的な人を形成します。この神聖な事柄には空間の要素も時間の要素もありません。からだは神聖な命において、また神聖な霊においてかしらと一です。
 2. 神聖な観点によれば、わたしたちは昇天したキリストと一であり、彼の昇天はまたわたしたちのもので (2:6)。ここでこの昇天において、わたしたちは彼の豊満において彼を表現します。超越するキリストは三一の神の具体化 (コロサイ 2:9) であるので、彼の超越する伝達は三一の神のすべての豊かな分与を含んでおり、それはわたしたちをキリストの豊満とならせ、彼を表現します (エペソ 1:22-23. 3:19, 8)。
- E. キリストは彼の昇天において、天における大祭司ともされました。彼は神の臨在の中でわたしたちを担い、またわたしたちのすべての必要を顧みます。彼は昇天において彼の祭司の職務に就任しました——ヘブル 2:17-18. 4:14-15. 詩 110:1-4. ヘブル 5:6. 7:26 :
1. 一方で、キリストは、天において諸召会のためにとりなしている大祭司です (25-26 節. ローマ 8:34)。他方で、彼は、諸召会において行動しそれらを顧みている大祭司です。啓示録第 1 章 13 節において、キリストは大祭司として描写されています。それは彼の衣によって、すなわち、足まで垂れた衣である祭司の衣によって示されています (出 28:33-35)。
 2. 啓示録第 8 章において、キリストは金の香壇において香をささげる祭司として啓示されています、「また、もうひとりの御使いが来て、金の香炉を持って祭壇の所に立った。多くの香が彼に与えられたが、それはすべての聖徒の祈りと共に、御座の前にある金の香壇の上にささげるためであった」(3 節)。
 3. 旧約において大祭司は、わたしたちの大祭司であるキリストを予表します。出エジプト記によれば、大祭司はイスラエルの十二部族の名を彼の肩に、また彼の胸

に担い、神の御前で神の選びの民の名を担いました——出 28:9-10, 12, 21, 29 :

- a. 今日キリストはわたしたちの大祭司であり、わたしたちは彼の肩の上に、また彼の胸にあります。彼は天で彼の力をもってわたしたちを担い、彼の愛をもってわたしたちを保持する大祭司です。
 - b. わたしたちの大祭司として、キリストはまたわたしたちを顧みています。彼は「神にかかわる事柄において、あわれみ深い、忠信な大祭司」(ヘブル 2:17)であり、わたしたちの弱さに同情することのできる大祭司です (4:15)。
 - c. キリストは大祭司としてわたしたちを顧みっていますが、わたしたちはみな、彼がどのようにわたしたちを顧みるべきかについての自分自身の考えと感覚を持っています。しかしながら、わたしたちにとって益であることは、わたしたちの解釈にかかっているのではなく、彼の解釈にかかっています——ローマ 8:28-29。
 - d. 昇天したキリストはわたしたちとわたしたちの幸いを顧みただけではありません。彼は神の願いを顧みます。大祭司として、彼はわたしたちの必要よりも、神の必要を顧みます。
 - e. 主は大祭司として神の表現のために燭台を設立し、ともし火を整えます(啓 1:13. 2:1)。この働きは彼が聖徒たちを成就すること、また彼が召会を建造してイエスの生ける証しとすることを含んでいます。
4. 主は天におられる大祭司として、さらにまさった契約の保証、仲保者、執行者です——ヘブル 7:22. 8:6. 9:15-17 :
- a. 新約はわたしたちの嗣業のための新しい遺言です。遺言には多くの遺贈があり、そのすべては諸召会に遺贈される神聖な祝福です。
 - b. キリストは死なれて遺言を制定し、復活して遺言の遺贈の実際となりました。そして彼は今やご自身がわたしたちに遺贈した遺言の生ける執行者として天におられます (イザヤ 42:6)。
 - c. 新約におけるあらゆる祝福は (エペソ 1:3. ガラテヤ 3:14)、生ける、復活した、昇天したキリストによって、わたしたちに適用される遺贈です。
 - d. 天におけるキリストの務めには一つの目標があり、それは新エルサレムです。新エルサレムはキリストの昇天における働きの究極的完成となります。

務めからの抜粋 :

天における大祭司

キリストは彼の昇天において、天における大祭司ともされました。ヘブル人への手紙第 4 章 14 節は、わたしたちは「天を通って行かれた大いなる大祭司、イエス、神の御子」を持っていると言います。主は肉体と成ることを通して神からわたしたちに來られ、そして復活と昇天を通してわたしたちから神に戻って行ってわたしたちの大祭司となりました。彼は神の臨在の中でわたしたちを担い、またわたしたちのすべての必要を顧みます (ヘブル 2:17-18. 4:15)。ですから、ヘブル人への手紙第 7 章 26 節は言います、「このように、聖く、悪巧みがなく、汚れがなく、罪人とは分離しており、天より高くなられた大祭司こそ、わたしたちにふさわしかったのです」。キリストは彼の昇天において、天を通って行かれました。今や彼は天におられるだけではなく (ヘブル 9:24)、天より高く、すべての

天よりもはるかに高いのです（エペソ 4:10）。彼は昇天において彼の祭司の職務に就任しました。彼は地上にいたとき、今や天で行なっているように、祭司の務めを遂行しませんでした。

諸召会を顧みる

啓示録でキリストがまず執行者としてではなく、祭司として明らかにされていることは意義深いのです。啓示録第1章13節は言います、「その燭台の間に、人の子のような方が、足まで垂れた衣を着て、胸に金の帯を締めておられた」。一方で、キリストは、天において諸召会のためにとりなしている大祭司です（ヘブル 7:25-26、ローマ 8:34）。もう一方で、彼は、諸召会において行動しそれらを顧みている大祭司です。啓示録第1章13節において、キリストは大祭司として描写されています。それは彼の衣によって、すなわち、足まで垂れた衣である祭司の衣によって示されています（出 28:33-35）。

啓示録におけるキリストの最初のビジョンは、第1章に記録されており、祭司の衣服を着た大祭司のビジョンです。キリストは大祭司として、燭台の間を歩き、それらを顧み、特にともし火を整えることによってその輝きを顧みておられます。そして第8章において、キリストは金の香壇で香をささげる祭司として啓示されています、「また、もうひとりの御使いが来て、金の香炉を持って祭壇の所に立った。多くの香が彼に与えられたが、それはすべての聖徒の祈りと共に、御座の前にある金の香壇の上にささげるためであった」（3節）。ですから、第1章でキリストは、燭台を顧みる祭司として啓示されており、第8章で彼は、神に香をささげる祭司として明らかにされています。そして、もちろん、第5章で彼は全宇宙に対する執行者として啓示されています。宇宙にとってキリストは祭司ではありません。彼は執行者です。しかし召会にとってキリストは大祭司です。彼は天に昇天した方として、今や祭司として生き、働き、務めをしておられます。

わたしたちを担い、保持する

旧約において大祭司は、わたしたちの大祭司であるキリストを予表します。出エジプト記によれば、大祭司はイスラエルの十二部族の名を彼の肩に、また彼の胸に担いました。「あなたは二つの縞めのうを取って、その上にイスラエルの子たちの名を彫らなければならない。すなわち、その六つの名を一つの石に、残りの六つの名をもう一つの石に、彼らの生まれた順に彫らなければならない。……アロンはエホバの御前で彼らの名を両肩に担い、記念としなければならない」（出 28:9-10、12）。十二部族の名はまた、大祭司が着けた金の胸当てにはめ込まれた十二の石に彫られました：「その宝石はイスラエルの子たちの名にしたがい、彼らの名にしたがって十二でなければならない。それぞれの名にしたがって、十二部族のためにその名を彫らなければならない。……こうして、アロンは聖なる所に入っていくとき、裁きの胸当てにあるイスラエルの子たちの名を胸に抱いて、エホバの御前で絶えず記念としなければならない」（出 28:21、29）。胸当ての縞めのうと宝石の上に彫られた名は、大祭司が常に神の御前で神の選びの民の名を担ったことを表徴します。今日キリストはわたしたちの大祭司であり、わたしたちは彼の肩の上に、また彼の胸にあります。彼は天でわたしたちを担い、わたしたちを保持する大祭司です。

わたしたちの大祭司として、キリストはまたわたしたちを顧みています。彼は「神にか

かわる事柄において、あわれみ深い、忠信な大祭司」（ヘブル 2:17）であり、わたしたちの弱さに同情することのできる大祭司です（ヘブル 4:15）。

キリストは大祭司としてわたしたちを顧みていますが、わたしたちはみな、彼がどのようにわたしたちを顧みるべきかについての自分自身の考えと感覚を持っています。例えば、わたしたちはみな健康で長生きしたいのです。わたしたちは百歳まで生きても満足しないかもしれません。百歳に達すると、百二十歳になるまで生きることを望むかもしれません。しかしながら、しばしば主がわたしたちを顧みる方法は、わたしたちが願うこととは異なります。ですから、わたしたちは不平を言うかもしれません、「主よ、あなたはどのようにわたしの健康を顧みようとされないのですか？ わたしは病気であり、いやしを祈ります。主よ、あなたの力はどこにあるのですか？ あなたのいやしはどこにあるのですか？ 主よ、あなたはなぜわたしに聞いてくださらないのですか？」。主はいやしのための祈りに答えないかもしれません。ある人に対する顧みにおいて、彼はその人が病気や死ぬことを許されるかもしれません。わたしたちは、何がわたしたちにとって益であるかを知りませんが、主は知っておられます。彼は、地上におけるわたしたちの生活に必要なとされるものを知っておられます。

わたしたちはみな、わたしたちの生活について自分の好みを持っています。わたしたちは富むこと、また多くの物質的なものを持つことを願うかもしれません。しかし、主はわたしたちが貧しくあることを許し、わたしたちから多くのものを取り上げるかもしれません。同じように、わたしたちは主を愛し、彼に仕える子供たちを持つことを願うかもしれません。娘を持つ人たちは、自分の娘が諸召会の中で最上の兄弟と結婚することを願うかもしれません。しかしながら、わたしたちの子供たちについての状況は、わたしたちの願いとは大いに異なったものとなるかもしれません。もしこのことについて主に尋ねるなら、彼は言われるかもしれません、「あなたはあなたにとって何が最上であるかを知らない。わたしはこれがあるべき道であることを知っている」。

おそらくあなたは、そのようなことはキリストの昇天と何の関係もないと思っているでしょう。しかしながら、キリストの昇天は、確かにこれらの事柄と関係があります。主の昇天は彼の祭司職を含みます。昇天した方として、彼は大祭司であってわたしたちを担い、わたしたちを保持し、わたしたちを顧みておられます。しかしながら、わたしたちにとって益であることは、わたしたちの解釈にかかっているのではなく、彼の解釈にかかっています。例えば、あなたは長年の使用に耐えることを願って、新車を買うかもしれません。しかしその事についての主の意見は、あなたの車の耐用期間が非常に短期間であるかもしれません。もしあなたがわたしの所に来てこう言うとしたら、「わたしは新車を買ったのですが、わずか二、三週間で駄目になりました。なぜこんなことが起こったのでしょうか？

わたしが事故に遭い、車が駄目になることを主はご存じなかったのでしょうか？ 彼がこれを知っておられたとしたら、なぜ彼はわたしがそれを買うのを許されたのでしょうか？ なぜわたしを止めなかったのでしょうか？」。もちろん、わたしは、なぜかを説明することはできません。ただ主がその理由を知っておられます。彼は大祭司です。

通常、わたしは聖徒たちから彼らの状況についてわたしに尋ねる手紙を受け取るとき、手紙をわきに置きます。そのような手紙をわきに置くのは、わたしは大祭司ではなく、また聖徒たちについて彼の心にあることが何であるかを知らないからです。わたしはそのよ

うな事柄について、主に何も言うことはできません。もしわたしが何かを言おうとしても、実際は聖徒たちを助けていないでしょう。五十五年前、わたしはそのような質問をされたとき、多くの言うことができました。多く言うことがあったのは、わたしが何も知らなかったからであり、それゆえにでしゃばって多くの事を語りました。しかし今や、さらに多くの主の経験と、さらに多くの主の知識を持っているので、何か言うべきことがあっても、ごくわずかです。

それにもかかわらず、わたしはこれを言うことができます。わたしたちに対する主の顧みは、常に積極的です。ある日、わたしたちは彼に会い、彼を礼拝するでしょう。わたしたちの何人かは彼に言うでしょう、「主イエスよ、わたしの状況についてあなたに不平を言ったことを赦してください。今わたしは、わたしに対する神のみこころがすばらしいことを知っています」。わたしたちの大祭司は、わたしたちすべてを良く顧みておられます。

神の願いを顧みる

昇天したキリストはわたしたちとわたしたちの幸いを顧みただけではありません。彼は神の願いを顧みます。この大祭司はわたしたちの必要よりも、神の必要を顧みます。神は燭台を願っておられます。ですから、主は神の表現のために燭台を設立し、ともし火を整えます（啓 1:13. 2:1）。この働きは彼が聖徒たちを成就すること、また彼が召会を建造することを含んでいます。主は今やイエスの生きた証しを建て上げておられます。

新約の執行者

主は天におられる大祭司として、さらにまさった契約の保証、仲保者、新約の執行者です。ヘブル人への手紙第7章22節は言います、「このようにして、イエスはさらにまさった契約の保証にもなられました」。キリストがさらにまさった契約の保証となられたことは、彼が大祭司であるという事実に基づいています。ヘブル人への手紙第8章6節はわたしたちに告げます、「彼が、……さらにまさった契約の仲保者でもあられる」。さらに、ヘブル人への手紙第9章15節と16節は言います、「このゆえに、彼は新しい契約の仲保者なのです。それは、第一の契約の下での違反を贖うために、彼が死を遂げられ、召された者たちが、約束された永遠の嗣業を受けるためです。ところで、遺言がある場合、その遺言を作成した者の死が実証されなければなりません」。

15節には「契約」という言葉があり、16節には「遺言」という言葉があります。ギリシャ語では、契約と遺言のいずれにも同じ言葉が使われています。契約は、契約された民のためにある事を成し遂げるといふ約束を伴う協約であり、遺言は相続人に遺贈された、ある達成された事柄を伴う遺言書です。キリストの血で完成された新しい契約は、単なる契約ではなく、キリストの死によって達成されたすべての事柄をわたしたちに遺贈した遺言書です。まず神は、新しい契約を立てるといふ約束を与えました（エレミヤ 31:31-34）。そしてキリストは血を流してその契約を制定しました（ルカ 22:20）。この契約の中で約束されて達成された事実があるので、それはまた遺言書です。この遺言書、この遺言は、キリストの死によって確認され確証されました。そしてそれは今や昇天におけるキリストによって執行されつつあります。

わたしたちの大祭司は燭台を確立し、またともし火を整えておられます。この確立する

ことと整えることにおいて、彼はまたわたしたちのために新しい契約を執行しつつあります。新約には多くの遺贈があり、そのすべては諸召会に遺贈された神聖な祝福です。

聖書で「遺言」という言葉は、現代語の「遺書」に等しいのです。ですから、新約は、わたしたちの嗣業のための新しい遺書です。この新しい遺書は神聖な祝福の遺贈のためであり、キリストのパーソンと彼のすべてを含む贖いの働きを含みます。この新しい遺書を制定した方はイエス・キリストであり彼は、その制定のために死なれました。今や彼が制定したものは何であれ、わたしたちに遺贈されており、わたしたちに有効です。

遺書の制定とその中に遺贈されているすべては、その遺書を作成する人の死を必要とします。いったんその遺書の作成者が死ぬと、その遺書の中の遺贈は相続者たちに有効になります。主を賛美します、キリストは死んで遺言を制定しました。そして彼は今や、わたしたちに遺贈した遺言の生ける執行者として天におられます！ 彼はどのようにこの遺言を執行されるのでしょうか？ 彼が新しい遺言を執行されるのは、燭台としての諸召会を設立することによって、またすべてのともし火を整えることによってです。

まさにこの瞬間において、昇天したキリストは燭台を設立しつつあり、またそのともし火を整えておられます。わたしは、日ごとに彼の整える下にあると証しすることができます。なぜならわたしには、整えられる必要がある多くのものを持っているからです。わたしはまた、彼が諸地方召会の間を歩いていること、金の燭台を設立しつつあることを認識します。これを行なうことによって、彼は実際的に新約を執行し、遂行しつつあります。新約におけるあらゆる祝福は遺贈であり、生ける、復活し、昇天したキリストによってわたしたちに適用されます。これは昇天におけるキリストです。主を賛美します、わたしたちはこのようにして彼を享受することができます！

天における大祭司としてのキリストの務めには一つの目標があり、それは新エルサレムです。新エルサレムはキリストの昇天における働きの究極的完成となります。キリストが今、昇天において働いておられることは何であれ、来たるべき新エルサレムにおいて究極的に完成するでしょう。(ルカによる福音書ライフスタディ、メッセージ 79)